

話す力

学力研常任委員 深沢 英雄

一、説得の話法

教師二年目で三年生を持った時、元気な子どもたちは、授業が終わるとできるだけ早く運動場に行こうとして、廊下を全速力で走っていました。教室で、「廊下は走ってはいけない。」と注意の話は何度もしていました。でも全く効果はありません。

教室を飛び出した子どもの様子を見ると、生徒指導の先生が止めてくれていました。「深沢先生。この子たちはスピード違反をしたので、捕まえました。」とニコニコしていました。その先生に相談しました。そうすると「忍者歩きを教えたらと教えてくれました。子どもたちが廊下をドタバタと音を立てて走ったら、「廊下は走るな」と注意する前に、「みんな、こ

んなふうに音を立てないで歩けるかな。忍者歩きっていうんだ」とかなんとか言いながら、教師が音を立てないで歩いてみせる。爪先でさつさと歩くと、音が出ない。「どうだ。こんなふうに音を立てない『忍者歩き』でささっと歩けるかな」と話をしてやるのだと言うのです。教えられた通りに話をしました。子どもたちは練習ははじめました。と、すぐに、音を立てないで、歩けるようになりました。

「すごい。すごい」とほめると走る子がいなくなりました。話の仕方でも子どもたちが変わることを実感しました。指導の基本形は説得です。指導とは子どもたちが「なるほど」と思い、「やろう」という気にさせるはたらきかけなのです。

二、教師の話し方とは

「教師の話し方で、もつとも大切なことはなにか」と聞かれたら、「子どもにとどく力をもっているか、どうか」ですと答えます。「子どもにとどく」とは、子どもに、正確にわかりやすく伝わるだけでなく、子どもの体に快く触れ、心に響き、知にはたらきかけ、感情に訴え、行為・行動をやさしく導くように、「とどく」ということです。

教師に求められる話し方はどういうものでしょう。教師は教え好きです。だが、意外に、「わたしは話すのが苦手です」という若い教師は多いのです。若い先生で、学生時代まで人前で話をする経験を多くしてきた人は少ないものです。

教師の話し方で子どもたちが嫌いなのは、第一に声が小さいこと、第二に抑揚やハリがなく暗いこと、表情に豊かさがない、話がくどい、弁解が多いことです。

教師の声は全員の子どもに聞こえるように、しかも、明瞭で明るいトーンで発せられる、これが基本です。ついで、表情や手振り身振りの豊かさも重要で、とくに、笑顔の欠かせない職業です。

こうした表現力は、意識しないと高まりません。

三 話は人なり

「文は人なり」という言葉あります。話はその文の元だから、「話は人なり」と言えます。言葉は心の使い方方で左右されまです。心がそのまま言葉になって、現れ、話をなつて、人の心に働きかけるのです。良い話をするには、良い心をもっていなければなりません。いくら口先だけで、好いようなことをしゃべっても、子ども・生徒には伝わりません。するどく見抜かれます。

子どもがかわいい、子どもをよい方向に導きたい、子どもを善意でとらえたいという思い、教育愛が内面に蔵していないといけません。話は人格の表れです。教師は、子ども・生徒や周りの人から好意を持たれる人格を養わないといけません。話には個性が絶対に必要です。

四 話を聞かせる4つの工夫

話の価値を決める要素として、心の豊かさ、その人格からにじみでてくる力が

根底にあります。しかし豊かな人間性があれば、いい話ができかというところがありません。話をする場合は、その話題となる内容の質と量は大切な点です。そして、正確に的確に伝える技術が必須です。

教師の話は長い。子どもたちは「この先生の話は長い」と思うだけで最初から聞こうとする意欲を失います。そこで、話はなるべく短くする。一分間で、一つの事を説明できるようにする。しかし、長い話をする必要に迫られることもあります。あきさせない工夫が必要です。

第一は、「話す」に留まらず、「語る」ことです。「話す」とは、言葉で伝えて広め、口で述べ「情報を伝えている」だけです。語るとは、聴いたことや学んだことを自分の考えや想いを交えながら、自分をさらけ出し実感した自分の言葉で語ることで、子どもたちに伝わります。

第二は、物や図を見せながら話す具体物提示話法を用います。聴覚だけでなく視覚にも訴えて話すのは効果があります。

第三は、簡潔に話せるように、箇条書

き話法を用います。「これから三つの話をします。その一つは」と箇条書きのように話す語法です。小学校高学年でも三か条まで、時間にして計三分が限度です。たくさんだと覚えていることができませ

ん。

第四は、笑いをとることです。教師のユーモアは子どもたちを包み込み、心を開放する力を持っている。笑いがない話は、今の子どもたちを引きつけることはできません。

五 話術の修業

教師は毎日喋っている仕事ですから、話のプロです。自覚さえすれば、話す練習は事欠きません。自分の話を録音して聞いてみたり、大きな鏡の前で身振りやいろいろな表情をつくったりする事ができます。それらが子どもたちにとってどのような印象を与えるか分析的に検討できます。周りの教師から学び、自分なりの方法で話術を磨いていく努力をすることが、魅力ある話し方ができる教師になると思います。